

れる新しい土器が使用された。この時代を「弥生時代」という。この時代は紀元三世紀ごろまで続いた。この弥生時代には水稲耕作が始められ、前の時代よりも貯蔵がきくし、水田を増したり、農耕技術を改良したりしていつそう収穫をふやし、多く貯えることもできるようになった。労働期間も断続的でそう長くはかからず、今まで主として女の仕事であったのが男も従事するようになったので、生活は次第に安定し、今までの狩猟や漁撈に代って生業の主体となっていた。日本人の米食生活は実にこの時代に始まったのである。又稲作は共同で働くようになったので、人々が次第に集まって村を作り、その人々を支配する有力者が出て村を支配するようになってきた。

弥生時代には、北九州を中心に村落ごとに死者をかね棺や箱式石棺などに納めて埋葬する共同墓地が発達したが、そこに埋葬されている棺には、中国や朝鮮から来たもの、日本で模造されたものなどが、副葬品としてまれに発見され、当時の貴重品を持っていることから多分当時の支配者層がいたと考えられている。このようにして人々の間に次第に貧富の差が生じてきたのである。村が各地に発達すると村は地域ごとにまとまったり、強い村が周りの弱い小さな村を統合して支配するようになり、やがて小さな国、つまり原始的小国家（部落国家）へと発展していくのである。この部落国家は紀元前一世紀ごろから多く現われ、その中には中国の朝廷に朝貢する国もあつたと中国の「漢書」の「地理誌」に記されている。又三世紀になると、中国の「魏志倭人伝」によれば、日本では部落国家の地方的な統合が進展して二十九か国があり、女王「卑弥呼」が君臨していたという。このような部落国家の大規模な地方的

統合がやがて大和朝廷によって国土統一をされたものであろう。

原始時代を整理するとおおよそ次のとおりである。

地質年代	洪 積 世		沖 積 世	
	旧石器時代	中石器時代	新石器時代	金石併用時代
考 古	先 土 器 時 代		縄 文 時 代	弥 生 時 代
	原 始 時 代		原 始 時 代	大 和 時 代
歴史時代	原 始 時 代		原 始 時 代	古 代

一、日本列島の誕生

一体、私達が住んでいるこの地球はいつごろできたのであろうか。初めは真赤な熔岩のかたまりだったが、次第に冷却してでこぼこの岩石になり、地球の表層の部分、つまり地殻ができてからでも三十億年から四十億年になるだろうと地質学者は言っている。でこぼこの岩石の低い所に水がたまり、始めはどこも塩からい水だったが、陸地の水は海へ流れ込み、海水はどこも塩からなくなった。

では、日本列島はいつごろ誕生したのだろうか。日本列島を形造っている最古の地層は約三億五千年前の古生代中期といわれている。しかしこのころはまだ日本は海の底で、三葉虫や紡錘虫が泳ぎ回っており、陸地では飛龍や恐龍等がのそりのそりと歩き回っていた。そして石炭期、二疊紀と続いて、古生代も終

地球の歴史

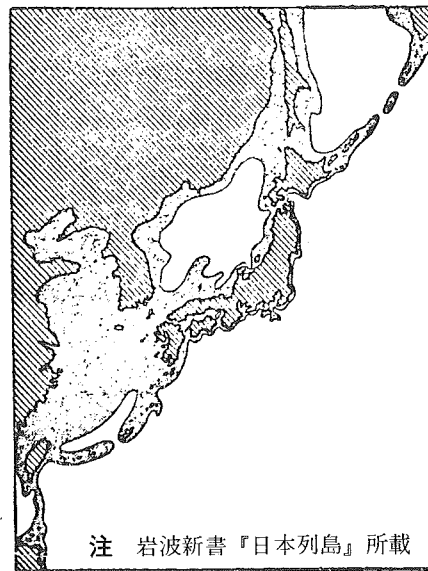
地質時代	年数	主な生物の変遷
始生代 (期間)	18億年以上	
先カンブリア時代	14億6,000万年	
原生代	21億年+	海生藻類、植物時代
前古生代	6億年	海生無脊椎動物時代
カンブリア紀 (1億年)		三葉虫
オルドビス紀 (6千万年)	5億年 (大陸時代)	魚類時代
ゴトランド紀 (シルル紀) (4千万年)	4億4,000万年	
中生代	4億年	日本最古の化石 (浅海の時代)
デボン紀 (5千万年)	3億5,000万年	両棲類時代
石炭紀 (8千万年)	2億7,000万年	アンモナイト (頭足類)
二畳紀 (4千5百万年)	2億2,500万年	裸子植物時代
中生代	1億8,000万年 (大褶曲山脈の形成) (大陸と内海の時代)	巨大な昆虫時代
ジュラ紀 (4千5百万年)	1億3,500万年	
白亜紀 (6千5百万年)	7,000万年	は乳類時代
新生代	100万年~200万年	哺乳類時代
第3紀		
第2紀		
第1紀		

第4紀対比表

時代区分	気候	年数 (単位: 万年)	文化階梯	人類	生物群
鮮新世	氷期	100~200	早期旧石器文化	アウストラロピテカス、猿人	メタセコイア植物群、更新期、ステゴドン動物群
洪積世前期	テケレン暖期	60.0			
洪積世中期	ギュンツ氷期 (第1氷期)	55.0	前期旧石器文化	原人	
洪積世後期	ギュンツ・ミンデル氷期 (第1間氷期)	45.0			
洪積世後期	ミンデル氷期 (第2氷期)	38.0			
洪積世後期	ミンデル・リス氷期 (第2間氷期)	24.0			
洪積世後期	リス氷期 (第3氷期)	15.0			
洪積世後期	リス・ウルム間氷期 (第3間氷期)	5.3			
洪積世後期	古ウルム氷期	4.4			
洪積世後期	ゲトワイゲル氷期 (第1氷期)	2.9			
洪積世後期	主ウルム氷期	2.6			
洪積世後期	バウドルフ氷期	2.5			
洪積世後期	ウルム最盛期 (第3氷期)	2.0			
洪積世後期	ウルム氷期後期	1.7			
洪積世後期	ドリラス最古期	1.6			
洪積世後期	アレレード期	1.0			
洪積世後期	新ドリラス期	0.9			
洪積世後期	先ボレアル期	0.75			
洪積世後期	ボレアル期	0.45			
洪積世後期	アトランド期	0.25			
洪積世後期	亜ボレアル期				
洪積世後期	亜アトランド期				

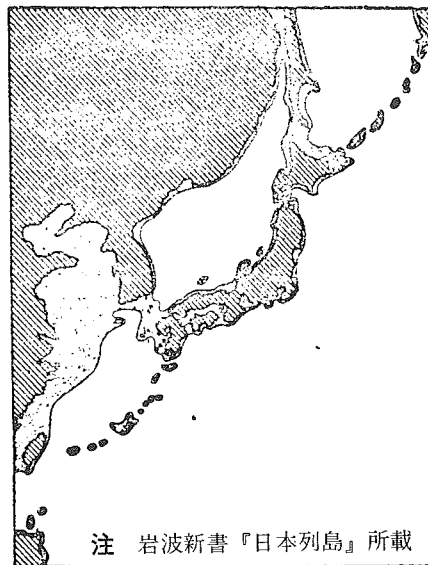
注1. 氷期=地球の気温が寒冷化して北半球の大部分が厚く数メートルの大氷河におおわれた期間
 2. 間氷期=氷期と氷期の間の地球の気温が比較的温暖化して大氷河が縮み、氷河の氷が溶けた温暖な期間
 3. ギュンツ、ミンデル氷期等の名称はヨーロッパアルプス地方の氷河の底層の発達している河川の名にちなんだものである
 4. 気候のKは寒、Wは暖の記号である

洪積世初頭の日本



注 岩波新書『日本列島』所載

第3氷期の日本



注 岩波新書『日本列島』所載

わりに近づくころ、火山活動が盛んになり、海底にあった古日本が始めて海上にその姿を現わして大陸の一部となったという。更に中生代の白亜紀のころな日本は大陸と完全な陸続きであったが、それからずっと時代が降って、約二千五百万年前の新生代の第三紀にアジア大陸の東縁に再び激しい断層運動が起こって、ここに日本海の原始形態が生まれた。又オホツク海や東支那海もその原型ができてきた。このような断層運動は一回限りのものでなく、何回となく同じ地域に行われ、日本列島は形造られていったのである。こうして断層運動や海侵、堆積が間断なく続いた第三紀もやがて第四紀へ引きつがれた。第四紀は洪積世(更新世)と沖積世(完新世)とに区分されている。

洪積世は今からおよそ六十万年前とか、百万年前からとか言われてきたが、昭和三十四年（一九五九）、東アフリカの溪谷から発掘された人骨のまわりの地層をカリフォルニア大学で年代測定したところ、今から約百六十三万年から百八十九万年前のものという年代になった。もしこれが正しいとすると、洪積世は約二百万年前からということになる。沖積世は約一百万年前から現在までである。

※古生代とか中生代とかいう「生」というのは「生物」の意味であり、それぞれの「代」はいくつかの「紀」に分けられ、その「紀」は更に「世」、「世」は「期」に分けられている。このような時代区分は地層の重なる順序と、それぞれの地層の中から発見される生物（主として動物）の化石の違い（変遷）に基づいた区分である。

地球上の生物の出現は、現在においては約三十億年前の始生代のことと考えられている。現在、台所の害虫の代表にされている「ごきぶり」は約三億年前の古生代後期のころ発生したものとされている。

洪積世の時代には、五回の氷期と四回の間氷期が繰返された時代で「氷河時代」とも言われている。もち論この氷期と間氷期は、前の表を見てもわかるように、手のひらを返すようにはつきりと変わるものではなく、両者とも寒暖の起伏があったのである。

氷期には地球上の水分の大量が大陸氷河や山岳氷河として長く陸上に固定されるので、海水は世界的に減少し、今までの海岸線（海と陸との界の線）は遠く沖の方へ退き（このことを海退という）、浅い海底であった部分は陸地となるわけである。又間氷期には氷期とは逆に、今まで氷河として陸上に固定されていた大量の水分がとけて河水となり海へ流入するので、海水は世界的に増し、海水が陸地に進入（こ

のことを海進という）して、今まで海に近接していた低い陸地は海底となるのである。

※地質学者の計算によると、洪積世の氷期とは比較にならないほど小さい現在の氷河（南極大陸やグリーンランドの大陸氷河、ヒマラヤやアルプス等の山岳氷河等）でさえも、それが全部とけて河水となり、海へ流入した場合は、現在の世界中の海水面がおよそ七十メートルも上昇するという。とすれば標高二三三メートルの春日山もふもとのおよそ三分の一くらいの高さの所まで海水が押し寄せ、大和町の平坦部は全部海底になってしまうということになる。

○ 洪積世前期（六〇万年——二〇〇万年前）

● 第三紀から第四紀への移行期で、世界的な寒冷気候が到来した時期である。

● 第三紀の湿潤温暖型の植物であるメタセコイア等が日本から姿を消し、第四紀型の寒冷種であるチヨウセンマツ、ヒノキ等が現われる。

● 海水が蒸発して降雪となり、大陸ではそれが溶けないで氷河となる。そのため海水面はおよそ百メートルから二百メートルも低下し、東支那海や日本の周辺は一連の陸地となり、アジア大陸ばかりでなく、フィリピン、ジャワあたりまで陸続きとなった。そこでインドやジャワを原産地とするパラステゴドン象やステゴドン象等が日本へ渡来した。

○ 洪積世中期（一五万年——六〇万年前）

● 第二氷期になるとカラマツ、エゾマツ等の針葉樹も現われ、寒冷な気候が日本をおおった。

- 動物ではサイ、トラ、クマ、イノシシ等北方系のもの、東洋象、野牛、水牛等南方系の暖帯性のものもいた。
- 日本各地に火山の爆発や陥没など活発な地殻の変動があいついで起こった。
- 気候は比較的温暖でカヤ、ヤマモモ、カシ、サザンカ、モモ等が茂り、前の東洋象に代わってナウマン象の群が住むようになった。
- 後半は第三氷期に入り、気候は再び寒冷となり、動物群も北方系へ代わった。
- 洪積世後期(二万年——一五万年前)
 - 前半は第三間氷期で、日本周辺も海進が始まり、次第に大陸から分離し始めた。琉球列島が島として孤立化したのもこのころである。このころ日本ではナウマン象が物すごく繁殖した。
 - 後半はウルム最盛期で、日本でも日本アルプスや日高山脈に氷河が発達し、又氷期の海面低下は大きくなり、前の時期に開いた海峡は再び閉じて、大陸地域と日本列島の諸島とは再び陸続きとなった。
 - コメツガやチョウセンゴヨウ等の寒冷性樹林の中に、背の高さ四メートル半もあるマンモス象の姿もみられるようになった。又現在は日本にいないがヒグマ、オオカミ、ヒョウ、ヤマネコ等もいたという。
 - このころ日本全土においても、火山の爆発に伴う火山灰の降下があり、それが堆積してローム層(赤土層)を作った。そしてこのローム層の中に、日本旧石器時代の遺物が封じ込められていたということは、このころまでに日本列島にも人類の生活が始まったと言えるのではなからうか。

二、人類の出現

氷河に明け暮れた洪積世という第四紀に、哺乳類の進化の頂点として人類が誕生したという。

- アウストラロピテクス猿人Ⅱ大正十四年(一九二五)アフリカで発見された化石が人類の中でいちばん古く、猿と人間との中間のものであるが、石を割って石器を造る知恵があり、これをアウストラロピテクス(南の猿の意)と呼んでいる。
- 原人Ⅱ続いて少し新しいものにジャワ原人、北京原人というのがあり、これらは約五十万年前に生存したもので、もち論石や骨で作った道具を使い火も使っていた。このころから「ことば」を使っていたと考えられている。
- ネアンデルタール人Ⅱ原人の次に出てくるもので、ヨーロッパや中央アジアや北アフリカ等に住んでいたもので十数万年前のものである。猫背でがにまたの人類で、りっぱな石器を使って狩をしていた。
- クロマニヨン人Ⅱ約五万年から一万年前に広くヨーロッパに住み、現在の人類とほぼ同じで、主として洞窟内に住み、洞窟の壁や天井に狩りの成功を祈って動物の絵をかいた。一方アジア、殊に日本列島にはホモ・サピエンスと呼ばれる人類が住んでいた。

● 日本の原人

人類が日本に住みついていたのは、今からおよそ三十数万年前とも十数万年前とも言われ、現在のところ明確でないが、いずれにしても日本各地から発見される旧石器によって、洪積世の時代に人類が住んでいたことはたしかである。従来日本では一万年前からいから人類が住んでいたと考えられるのが普通であったが、昭和二十四年(一九四九)、行商の一青年が群馬県岩宿のローム層から旧石器時代の石器を発